

目次

黙示録論

5

Apocalypse

I 7

II 15

III 19

IV 26

V 31

VI 42

VII 62

VIII 67

IX 69

X 80

XI 89

XII 92

XIII 97

XIV 101

XV 109

XVI 115

XVII 127

XVIII 132

XIX 137

XX 141

XXI 142

XXII 143

XXIII 150

力ある者どもは幸いなり

169

“Blessed Are the Powerful: Reflections on the Death of a Porcupine”

ドストエフスキー「大審問官」への序文

187

“Preface to *The Grand Inquisitor* by F. M. Dostoevsky”

民主精神

205

“Democracy”

I 平均人 207

II 固有性 216

III 人格性 226

IV 個人主義 233

訳者あとがき

244

默示録論

D. H. Lawrence
Apocalypse (1931)

I

アポカリプスとは、あつさりいえばヨハネの黙示録のことだ。だがこの一篇はあつさり片づけられる代物ではない。過剰なほど神秘の衣をまとった記述に、実のところ何が黙示されているのか、人は二千年近くも頭を悩ませてきた。現代精神は概して人を煙に巻くような言辞を嫌う。それゆえ聖書のなかで最も人目を惹かぬ箇所は黙示録だということになる。

黙示録についてまずわたしが感じたのはそういうことだ。ごく幼いころから大人になるまで、非国教徒の家庭に育った子どもの例にたがわず、日ごとわたしは自分の無抵抗の意識に聖書の中身を注ぎ込まれた次第で、しかもほぼ満杯になるまでそれが続いた。まだ判断力はおろか、ささやかな理解力も身につけていないうちから、この聖書の言葉、聖書の細切れ^{ホーションズ}が注水治療^{ドゥーシユト}よろしく精神と意識に注がれ、体内に染み込んでゆき、感じ方や考え方の流れをすべて決める力を持つにいたった。だからわたしとしては、当の聖書の中身はもう^〱忘れた^〱が、ほんの一章でも読み始めると、腹立たしいほどしっかりと憶えている^〱ことを思い知らされる。しかも正直なところ真つ先に湧いてくる感情は、反発であり嫌悪であり憤懣でさえある。わが本能は聖書に憤っている。

理由はもはや明白だ。細切れの聖書が、日ごと年ごとに否でも応でも、吸収できるかどうかにはおかまいなく幼稚な意識へと注入されていたばかりか、平日学校でも日曜学校でも家庭でも少年禁酒団でもキリスト教青年共励会でも、日ごと年ごとに一方的な立場から講釈されていた、それもつねに道徳の教科書のごとく講釈されていたからだ。演壇の神学博士にしろ、わたしが通っていた日曜学校の教師だった大きな鍛冶屋さんにしろ、聖書解釈の仕方はそっくり同じだった。地面が無数の足跡に硬く踏みならされているように、聖書の一語一語が意識へと踏み固められたばかりか、その足跡は判で押したようにどれも等しく、解釈は決まり切っていたので、真摯な興味は消え失せた。

過程は自らの目的をくじいてしまうものだ。ユダヤ人の詩が感情や想像力に浸透し、ユダヤ人の道徳観が本能に浸透するうち、精神は意固地で反抗的になり、しまいには聖書の権威をまるごとねつけ、ある種の嫌悪感もあらわに聖書から顔をそむける。これこそわが世代に属する多くの人々の現況だ。

さて、一冊の書は測りがたい存在である限り命脈を保つ。測りつくされるや命脈を絶たれる。同じ本でも、五年後に読み直してみるといかに趣が異なるか、それは驚くばかりだ。なかにはとてつもなく成長する本もある。以前とはまるで別物だ。目を見張るほど変わったので、読む側としては自分自身が別人になったのかと疑いたくなる。また逆に、以前よりずっと貧弱になる本もある。わたしは『戦争と平和』を読み直してみても、およそ心を動かされる

ところのない作品だとわかつてがっかりした。かつてはあれほど夢中になったのに、今はそんな心境にはなれぬと考えると、打ちのめされんばかりになった。

これが実情だ。ひとたび測りつくされるや、ひとたび知りつくされ、意味が固定ないし定着するや、書物は終わりを迎える。受け手の心を動かす力を、しかも違ったかたちで動かす力を有するあいだは、生きていられるのだ——読むたびに受け手の目に違つたものに映る限りは。いっぺん読めば魅力が尽きる底の浅い本があふれているために、どの本も似たり寄つたりだ、いっぺん目を通せば用済みだと、現代人は思つてしまいがちだ。だがそうではない。この点も現代人は次第に理解してゆくだろう。本から得られるまことの喜びは、同じ本を繰り返し読み、別の意味を、別の段階の意味を見出すことにある。これもやはり価値観の問題だ。わたしたちは氾濫する本に埋もれてしまい、本とは貴重なもの、宝石や美しい絵のように貴重なものであり、その秘奥ひおくを見極めようと努めるたびに、ますます感慨深い経験をすることも可能だということをもはやろくにわかつていない。六冊の違つた本を読むより、間を置きながら一冊の本を六度読むほうがはるかに好ましい。なぜならもしある本が六度読むに足る内容を蔵しているなら、受け手としては読むたびに経験が深まり、情の面も知の面も含めた全霊が豊かになるだろうからだ。一方、六冊の本を一度ずつ読むだけなのは、単なる薄っぺらな興味の積み重ね、現代の日々のわずらわしい積み重ねで、まことの価値を欠いた量の勝負にすぎない。

ここで読者もまた二派にわけることが可能だろう。娯楽やほかない興味のために本を手にする広汎な大衆と、自分にとつての価値が認められる本、すなわち経験を、いつそう深い経験をもたらしてくれる本を求めるごく少数の人々だ。

聖書は、意味を勝手に固定されてしまったため、読者にとつて、ないしは一部の読者にとつて、ひととき殺された本だ。薄っぺらな意味あるいは俗っぽい意味での聖書の死を、わたしたちはいやというほど知らされたので、もはや聖書からは何も得るものを見出せない。なお困ることに、今や本能と化したともいえそうな旧習によつて、聖書はいとわしくてならぬ物事の感じ方を押しつけてくる。こちらとしては大嫌いなのだ、聖書が当然のように押しつけてくる。教会堂チャペルや日曜学校流の感情が。そんな卑俗なるものは、ことごとく追い払いたい——なぜならまさに卑俗なるものだからだ。

聖書全篇のうち最もいまわしい一篇は、ふつうに読む限り黙示録だ。十歳にも満たぬうちに、わたしは意味もわからず真剣にもなれぬまま、黙示録を十回以上も聴いたり読んだりしていたはずだ。そうして意味もわからず、またわからうともしないまま、この一篇を心から嫌い続けていたはずだ。牧師であれ教師であれ一般人であれ、聖書を手に取る者が敬虔めかして、これ見よがしに、しかつめらしく、もつたいぶつて朗々と読むのが、わたしはごく幼いころから、意識こそしなかつたものの、いやでたまらなかつたに違いない。いかにも、牧師さま、ふうの声^グが心の底から嫌いだった。黙示録のある部分をえらそうに読み上げるとき、

その声は決まってとりわけひどくなつた。わたしにとっては今でも心を惹かれるくんだりさえ、思い出すと寒気がしてしまふ。非国教派聖職者の大仰な朗読の声が耳に残っているからだ。「われまた、天の開けるを目の当たりにしたるに、見よ、白き馬あり。それに乗りたる者は」——ここで記憶がいきなり途切れ、続く言葉をわざと消し去ってしまった——「信義厚く誠実なりと称せられし」〔「ヨハネの黙示録」第一節〕。幼いながら、わたしは寓話をいやらしいと感じた。この白馬にまたがる者が、信義厚く誠実なりと称せられるように、人間が単なる属性で呼ばれるとは。同じ意味で、わたしには『天路歷程』⁽¹⁾はどうしても読み切れなかつた。少年のころ、「全体は部分より大なり」とエクレイデスに学んだとき、これで自分にも寓話の問題は解けるぞとぴんときた。人間はキリスト教徒以上の存在だし、白い馬にまたがる者は単に信義厚く誠実なる者以上の存在に違いない。ただの属性の権化にすぎぬならば、人間はわたしにとってはおもはや人間ではない。若いころのわたしは、エドモンド・スペンサー⁽²⁾やその代表作『妖精の女王』⁽³⁾（一五九〇、一五九六）が大好きだったというに近いが、あの寓意だけは飲み込もうにも胸のところ詰まつた。

だが黙示録は、ごく幼いころから今にいたるまで、わたしの性には合わない。まず第一に、あの目もくらむばかりの心像表現は、とことんわざとらしくて不愉快だ。

「御座の前に水晶のごとき浄玻璃のごとき海あり。御座のまなかと御座のまわりに、前も後ろも目に満ちたる四つの生き物あり」〔「ヨハネの黙示録」第四章第六節〕

「第一の生き物は獅子のごとく、第二の生き物は牛のごとく、第三の生き物は人さながらの面おもてを持ち、第四の生き物は空飛ぶ鷲のごとし」〔同第四章第七節〕

「四つの生き物、各自に六つの翼あり。翼の内は目に満ちたり。この四つは日ひるも夜もたえず言う、『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、昔おわし、今おわし、のちにおわしたもう主なる全能の神』」〔同第四章第八節〕

こうしたくだりは大げさでわざとらしいため、わが少年の心をいらだたせたり困らせた。もしこれが心像表現だというなら、心に像が浮かびえぬ表現だ。なぜなら、前も後ろも目に満ちたる四生物など、どうしてこの世にありうるのか。またどうして「御座のまなかと御座のまわりに」ありうるのか。同時に二箇所にあるわけがない。だがアポカリプスの記述とはこんな具合だ。

さらにいえば、心像表現はたいいてい詩情を欠いて一人よがりな代物であり、かつなかには実に見苦しい箇所もある。たとえば、血の修羅場をくぐったのたぐい〔同第十六章第三、四節、第十七章第九節、第十節、第十一節〕や、騎手の血に染まつた衣〔同第十九章第十三節参照〕や、小羊の血で洗い清められた人々〔同第五章第九節、第十節、第十一節、第十二節、第十三節、第十四節、第十五節、第十六節、第十七節、第十八節、第十九節、第二十節、第二十一節、第二十二節、第二十三節、第二十四節、第二十五節、第二十六節、第二十七節、第二十八節、第二十九節、第三十節、第三十一節、第三十二節、第三十三節、第三十四節、第三十五節、第三十六節、第三十七節、第三十八節、第三十九節、第四十節、第四十一節、第四十二節、第四十三節、第四十四節、第四十五節、第四十六節、第四十七節、第四十八節、第四十九節、第五十節、第五十一節、第五十二節、第五十三節、第五十四節、第五十五節、第五十六節、第五十七節、第五十八節、第五十九節、第六十節、第六十一節、第六十二節、第六十三節、第六十四節、第六十五節、第六十六節、第六十七節、第六十八節、第六十九節、第七十節、第七十一節、第七十二節、第七十三節、第七十四節、第七十五節、第七十六節、第七十七節、第七十八節、第七十九節、第八十節、第八十一節、第八十二節、第八十三節、第八十四節、第八十五節、第八十六節、第八十七節、第八十八節、第八十九節、第九十節、第九十一節、第九十二節、第九十三節、第九十四節、第九十五節、第九十六節、第九十七節、第九十八節、第九十九節、第一百節〕など。また、小羊の怒り〔同第六章第十、第十一、第十二、第十三、第十四、第十五、第十六、第十七、第十八、第十九、第二十、第二十一、第二十二、第二十三、第二十四、第二十五、第二十六、第二十七、第二十八、第二十九、第三十、第三十一、第三十二、第三十三、第三十四、第三十五、第三十六、第三十七、第三十八、第三十九、第四十、第四十一、第四十二、第四十三、第四十四、第四十五、第四十六、第四十七、第四十八、第四十九、第五十、第五十一、第五十二、第五十三、第五十四、第五十五、第五十六、第五十七、第五十八、第五十九、第六十、第六十一、第六十二、第六十三、第六十四、第六十五、第六十六、第六十七、第六十八、第六十九、第七十、第七十一、第七十二、第七十三、第七十四、第七十五、第七十六、第七十七、第七十八、第七十九、第八十、第八十一、第八十二、第八十三、第八十四、第八十五、第八十六、第八十七、第八十八、第八十九、第九十、第九十一、第九十二、第九十三、第九十四、第九十五、第九十六、第九十七、第九十八、第九十九、第一百節〕が非国教徒の教会堂や英米の全礼拝堂、全救世軍のご立派な言葉遣いであり心像表現なのだ。しかも活気ある宗教は、時代を問わず、無教育な人々のあいだに浸透していると言われる。

その無教育な人々のあいだに、黙示録は今なおはびこっているさまが目につこう。実のところ黙示録は福音書や偉大な使徒書簡にまさる影響力を保ってきたし、いまだ保っているかもしれない。火曜の夜、もう暗い冬の夜に、大きな納屋然としたペンテコステ教会チャペルズに集った炭坑夫やその妻たち会衆は、王や統治者、水の上に座する淫婦同第十七章第一節参照、正確には、大水の上を座せる大淫婦。大淫婦とは悪魔や悪魔的なるもの」に対する弾劾演説を聴き、なるほどもつともだと感じ入っている。さらには大文字の名、すなわち、ミステリ奥義、大いなるバビロン、地上の淫婦やいまわしき事どもの母同第十七章第五節は、かつてスコットランド清教徒の小作人や、初期キリスト教徒のなかで気の荒い向きに對した場合と同じく、今日でも炭坑夫連中の心を震わせている。息をひそめて暮らしていた初期キリスト教徒にとつて、大いなるバビロンとは自分たちを迫害していた大都市にして大帝國ローマのことだった。そのローマを責めたて、諸王や富や威厳もろとも苦悶と破滅の声を上げるべくしむけるのは、胸のすく思いだった。宗教改革ののち、バビロンは再びローマと同一視されるようになったが、とくに今度は教皇を指す言葉となり、プロテスタント新教徒やライングラントおよびスコットランドの非国教徒やらのあいだでは、聖ヨハネに對する非難の声があらさまに響き渡つた——大いなるバビロン倒れたり、倒れたりて悪魔の住処すみか、もろもろの邪なる魂の砦たましひとりで、もろもろの汚れたるいまわしき鳥の檻となれり同第十八章第二節。今日でもこうした言葉は遠慮なく口にされており、なかでもときには、自信を取り戻しつつあるかに見える教皇やカトリック教徒に投げつけられている。だが現在ではそれよりも、バビロンとは裕

† 著者

D・H・ロレンス (David Herbert Lawrence)

1885年、イギリス中部ノッティンガムシャーに炭坑夫の息子として生まれる。小学校で教鞭をとる傍ら、1911年に長篇小説『白孔雀』を発表。以後、個人と個人との真の連帯の意味を追求して、作家活動に入る。代表作は『息子と恋人』(1913年)、『チャタレイ夫人の恋人』(1928年)など。そのほか、多くの中・短篇小説や戯曲、紀行、評論、詩作品がある。1930年、南仏ヴァンスにて死去。

† 訳者

井伊 順彦 (いい・のぶひこ)

早稲田大学大学院博士前期課程(英文学専攻)修了。英文学者。編訳書にF・スコット・フィッツジェラルド『バット・ホビー物語』、『世を騒がす嘘つき男——英国モダニズム短篇集2』、サキ短篇集『四角い卵』(いずれも風濤社)など。訳書にG・K・チェスタトン『法螺吹き友の会』、コリン・ウィルソン『必須の疑念』(いずれも論創社)、バーバラ・ピム『なつた羚羊』(風濤社)など多数。英国トマス・ハーディ協会、英国ジョウゼフ・コンラッド協会、英国バーバラ・ピム協会、各会員。

黙示録論 ほか三篇

2019年8月10日 初版第1刷印刷

2019年8月20日 初版第1刷発行

著者 D・H・ロレンス

訳者 井伊 順彦

発行者 森下 紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／奥定泰之

組版／フレックスアート

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1857-3 ©2019 Printed in Japan